



じゃがいもきれぎれ話

日本種馬铃薯協会顧問 塩田 弘行

5 ジャガイモの味（あじ）

小説、その後テレビにもなった「氷点」で一躍知名になり、その後小説、随筆などで次々と作品を発表して、女流作家となった三浦綾子が、かつてある随筆の中で

「わが家に、テレビ「氷点」の陽子役になった西山恵子さんたち一行が訪ねてこられた時、じゃがいもとかぼちゃを出したところ、みなさん大いに喜んで食べてくださり、特に恵子さんは誰よりもたくさん食べて、わたくしたちを喜ばしてくれた。

北海道のじゃがいもは今も昔も美味しい。塩煮にしても銀紙に包んでむしやきにしてもサラダにしても、からあげにしても、実に美味しい。今や溢れる食糧の中で美食に馴れた舌が、じゃがいもを美味だと感ずるが、昔は食べるものがない世だけに一層美味しかったのだ。じゃがいもよ、汝はその変遷を知るや知らずや。」

と書かれています。何も食糧難時代の感觸での美味ではなく、平和な世の中の現在でも、その美味なことに変わりはないのです。

また、これもいささか古い話になってしまいましたが、かつて東大生の間でサユリストとして憧れの的であった女優の吉永小百合が、結婚相手に「じゃがいものような味のある人」として多くの男性の中から彼、岡田太郎を射止めたのも、幸せをもとめて、土くさいが素朴であるじゃがいもの味の魅力を単直に表現したものでしょう。

北海道観光に来られるお客さんの魅力の一

つに、テレフォンカードにもなっているじゃがいもの花盛りの風景と、数々のじゃがいもの料理ですが、札幌から定山渓を経て洞爺湖への国道、観光ロードにある中山峠の売店で「揚げじゃが」が売られている。

並んで買もとめるお客の前で、油揚げして1本の割ばしに刺して出す。野趣味のある丸のまんまのじゃがいものおいしさは忘れることの出来ない味です。

じゃがいもの消費量が、諸外国と比較して日本が非常に僅かなことを指摘する人が居りますが、たしかにそれは事実です。しかし、日本ではお米、主要各国ではじゃがいもを主食としているので、根本的に食生活機構の異なる海外諸国と単純に比較し論ずることに矛盾があるのです。

ヴァン・ゴッホの油彩「馬铃薯を食べる人びと」に描かれていた時代（明治18年）とは異なり、今は「美と命を守るじゃがいもの料理」をトレードマークに、実に数多くの単行本、パンフレットなどが出されていて、じゃがいも料理が普及されています。

手近かな1つの例として、先年北海道で農業高校クラブの実績発表大会の「生活の部」で、十勝の士幌町に在る士幌高校の女子生徒が数多くのじゃがいも料理を発表して、最優秀賞を得て高い評価を受けたという喜ばしい事例があります。

終りにあえてここに述べることではない周知のことですが、じゃがいもが適当なカロリー源で、料理に塩分が少なく、高血圧、腎臓

病などの成人病を予防するなど、若返り食、理想的な老人食で、さらに脂肪、澱粉質の摂取を抑え、肥満を防ぐ効用は、美ぼうを追求する世の女性にとっては、牛乳や乳製品と併食すれば、ほぼ完全食となります。

フェミニストのひとりとしても、これからじゃがいも食を強力にすすめしたい。と言うといささが女性に力を入れすぎたかもしれませんが……。妄言多謝

6 ジャガイモの肌

北国のじゃがいもは花ざかりで、ロマンを求めてやってくる北海道観光客の旅情をなぐさめる季節となった。ここでは美しい花を語るのではなく、いもの肌のことにふれてみる。花と肌との活字の誤りではない。

北海道において、じゃがいもは農業生産上の基幹作物であり、その生産の60%がでん粉原料用として、工場に運ばれているが、本年は特に生産制限がきびしくなっているのが現況であり、他方食用、加工原料用としての開拓に積極的で、それらに適する新品種の育成を強力に推進しているものの、関係者にとっては頭痛の種となっている。

それで、消費者に好まれる味覚に秀れているものの生産は当然だが、今までの土くささのみを誇りとしては、需要は伸びるものではない。マーケットにおいて調理用として消費者を惹きつけるポイントの一つとして、リンゴや果菜類のように、外観の肌の美しさを必要とするものではないか。

「いも洗い」が行われるのもその一つであり、A農協やB農協が実施したが、その後の成否はどうなったのだろうか。

また、「この店のみかんはワックス処理をしてません」と札のかかったのを見たことが

あるが、殆んどのみかんがワックス処理して表皮を美しく、艶やかにして販売され消費者を惑わしているのが現状ではないか。10数年前、猿まねをしたある業者がじゃがいもにワックス処理をして出荷、結果的には不評で見事失敗、おかげで素肌の美は生き残った。

じゃがいもの品種の特性の中に、塊茎の皮色（はだ色）が記述されるが、一見同じ様に見えても皮色は全く千差万別で、淡黄白色、淡紅色、淡褐色、淡褐色で全面ネット状、黄白色で滑らかネット状を呈する場合もある、黄白淡黄白色外観はきわめて良いなどと表現される。

それがひとたび病虫害に侵されると、本来の肌色が失せ、大なり小なり表面に異常な病徴が現われる。

ある化粧品会社のコマーシャルに「素肌郷愁」というのがあったが、病虫害に侵され品種固有の美しい肌を失ったじゃがいも塊茎の皮色をみるとひとりでこの言葉が思い出される。女性の荒れた肌をながめて「そばかす美人」とか「あばたもえくぼ」などとうそぶいてご満足しているへそ曲りな男性の方々には何とも回答出来ないが、やはり素肌の美は女性にとって一番大切なものではないか。ここで女性の肌とじゃがいもの肌を同一視することは場違い、失礼、失礼。

じゃがいもの肌を荒すのは病虫害、土壌条件であり、これを除去することによって回避出来、美しい肌のじゃがいもが豊産されることはご承知の筈。そのためには、生育中の適切な栽培管理、薬剤散布などが必要、もちろんこの場合、残留毒性を含めての農薬の選定と農薬公害を無視、軽視することなく実施することは、農民としての責務なのだから。